



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	”軽度”発達障害を持つ子どもたちの支援 その3 : 北海道大学土曜教室の学び
Author(s)	小泉, 雅彦
Citation	子ども発達臨床研究, 2, 49-52
Issue Date	2008-03-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32448
Type	departmental bulletin paper
File Information	KOIZUMI.pdf



北海道大学土曜教室の学び

小 泉 雅 彦*

Learning from Saturday Class in Hokkaido university

Masahiko KOIZUMI

要 旨

土曜教室には、個別学習と集団活動があり、個別では子ども一人ひとりに応じたオーダーメイドの教材が用意され学習支援が展開されている。子どもの担当毎に教員、院生、学部生がチームを組んで支援にあたっている。土曜教室活動の最大の特徴は、Plan-Do-Check-Action が組み込まれていることである。事前・事後ミーティングと用紙を作成することにより、スタッフ自身が自分たちの指導や子どもの反応を振り返る。また複数の目で反省と改善を図ることが、自分たちのスキルアップにつながっていく。親との面談では、子どもの理解を深めるだけではなく軽度発達障害を持つ子どもが置かれている貧しい現状を認識する。私たちは、IEP を作ることで自らの専門性を高め、臨床に対する目と力を養っている。

キーワード：土曜教室 PDCA チーム IEP 学び

1. はじめに

土曜教室は、学習障害児の支援と臨床研究を目的に1998年11月に田中哲医師（現在都立梅が丘病院）をスーパーバイザーとして市立札幌病院診療院のぞみ分校でスタートした。1999年から当時病棟で実習を行っていた北海道大学の発達障害援助実習の一つの枠組みとして行われるようになり、2001年4月に北海道大学の乳幼児発達臨床研究センターで実施されるようになった。

現在、土曜教室は、土曜日の午後に軽度発達障

害の子どもをたちの支援を目的に行われている。土曜教室での活動は、二つに大きく分けられる。一つは、子どもの認知特性に応じた学習方法支援する個別学習、もう一つは子どもの対人面やコミュニケーションの成長を促す集団活動である。教室を実質的に運営しているのは院生であるTA（ティーチング・アシスタント）であり、各グループへの助言や集団活動のサポートを行っている。現在は10名の子どもが隔週の土曜日に通っている。教室のスタッフは、総勢40名で、発達障害援助実習を履修している学部3年生以外のスタッフ

*北海道大学大学院教育学研究科 博士後期課程

である院生、4年生、現職の教員はボランティアで参加している。

土曜教室は、個別学習と集団活動があり、個別では子ども一人ひとりに応じたオーダーメイドの教材が用意され学習支援が展開されている。中心になって子どもの指導に当たるのは、発達障害援助実習を受講する3年生であるが、子どもの担当毎に教員、院生、学部生が班（チーム）を組んで支援にあたっている。3年生の大半は実習終了後にボランティアスタッフとして参加し子どもを支えている。

実習を終えたスタッフや教員が、ボランティアとして参加する土曜教室には、ひきつける要因が明らかに存在をしていると考える。2007年度に作成した土曜教室の報告集の中で、投稿した多くのスタッフが『学んだこと』として「子どもたちとの関わり」、「教室での話し合い」、「保護者との話し合いを」をあげている。

そこで、本論では教室におけるスタッフの「学び」について、教室の概要に触れながら検討してみたい。

2. 学びを支える体制

土曜教室の最大の特徴は、システムの中に「PDCA (Plan-Do-Check-Action)」の取り組みが二重構造的に組み込まれていることである。ひとつは、毎回の個別指導を通して個別指導の後に、評価・修正、が行われ、いつも自分たちの取り組みを再吟味している。さらに半期ごとに指導の経過をまとめて評価し、子どものつまずきの要因を考え再度アセスメントを行い、次の半期のIEPを作成している。それを可能にしたのは日常的にスーパーバイズを受けられる環境とチームを形成して取り組める環境の存在といえる。教室のシステムを軸にしつつ「教室の学び」についていくつか述べたい。

(1) スーパーバイズ

学生が子ども相手に実習をつめる場は教育実習

以外では数少ない。その上、北大教育学部は、教員養成を主たる目的としてはいないために学内において実習ができることは、学生にとって臨床を経験する貴重な場となっている。

大学での実習でのメリットは、隔週で指導に当たるために十分に実習の準備が可能で、必要に応じて専門的な視点からスーパーバイズを受け教材研究にあたることができることである。以前担当したスタッフが先輩として学内にいることでインフォーマルな形で相談をすることが可能である。

(2) チームで子どもを見る

教室では、1人の子どもの多面的に見ていこうという視点から、班（チーム）を組んで取り組んでいる。図1は、ある子どもの班体制である。実習をする3年生を中心に、社会人、院生を含めたボランティアスタッフが多数参加している。そして発達心理、特殊教育、教育臨床の心理系だけではなく、社会福祉系や社会教育系の学生も多数参加しているために、複眼視的な視点から子どもを見ることが可能になっている。このような体制は、子どもに対する指導や対応の困難さを一人で抱え込むことなく、班として共有できる環境となっている。班でのミーティングの積み重ねは、スタッフへの安心感と子ども理解のためのベースになり、学生の確かな成長を支えている。

土曜教室は、一人の子どもに対して多くの時間を割いて複数の眼差しや手で支えていこうとして



図1 A班の構成

いる。それが、土曜教室臨床の魅力でもある。

(3) オーダーメイドの教材作り

図2は、教室の運営サイクルである。個別の指導では、グループごとにミーティングを開き、話し合いを積み重ねて教材を用意する。事前ミーティングでは、グループごとに事前ミーティング用紙を準備してきて、用意されてきた教材を中心に、目標が達成可能なのか、教材設定の理由や子どもの予想される解答、難しいと想定されたら、具体的な支援の手立てが議論される。

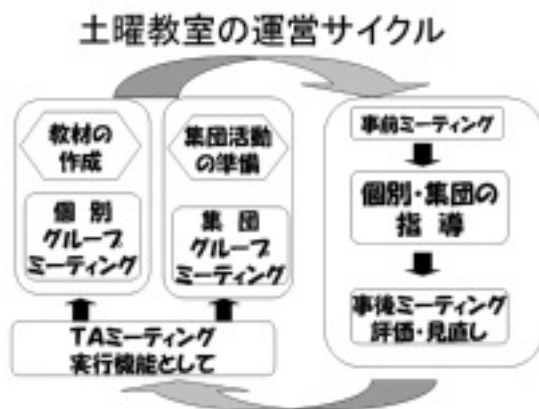


図2 土曜教室の運営サイクル

事後ミーティングについては、指導後には教材の妥当性だけではなく、うまくいかなかった時には「どのようなメカニズムが存在するのか」、じっくりと時間をかけ多くの可能性について議論する。土曜教室にとって「教材」は、子どもたちの内面（学習過程）を探る聴診器の役割を果たしている。事後ミーティングは、個別指導での教材を通し、子どもがどのように考え、答えたかが担当者より報告される。そこから子どもの学習過程に何が起こったかを議論する。答えは、そうそう簡単にみつからないが、いろいろな可能性を話し合う場になっている。教室でいつも大切にしていることが、子どもの躰きの背景を考慮すること、個々の子どもに認知スタイルにあった学習方法を探ることである。指導経過やディスカッションの内容をまとめて実習生は事後ミーティング用紙を作成

する。

事前・事後ミーティングと用紙を作成することにより、スタッフ自身が自分たちの指導や子どもの反応を振り返ることができ、複数の目で反省と改善を図ることで自分たちのスキルアップにつながっていく。

(4) 親からの学び

土曜教室の特徴の一つに指導後の保護者との1時間の話し合いがある。

話し合いの場では、学生は担当する子どもの個別での学習の取り組み状況や集団の様子を報告する。保護者は子どもの成長やエピソード楽しそうに語ったり時には思うように成長してくれない子どもに対するあせりや学校に対する思いを語ったりしてくれる。学生は、子どもたちが教室と学校で見せる様相の違いや子どもの抱える心理的な側面などを把握でき、親との面談は子どもの全体像を知る上では学生にとって貴重なものとなっており、担当している子どもの学校や家庭での心理的な側面をうかがうことができる。

親との面談は、子どもの理解を深めるだけではなく軽度発達障害を持つ子どもが置かれている貧しい現状を認識できるのである。

(5) IEP での学び

教室では、3月と8月の年2回ケースのまとめが行われIEPが作られる。IEPの作成は、半期ご

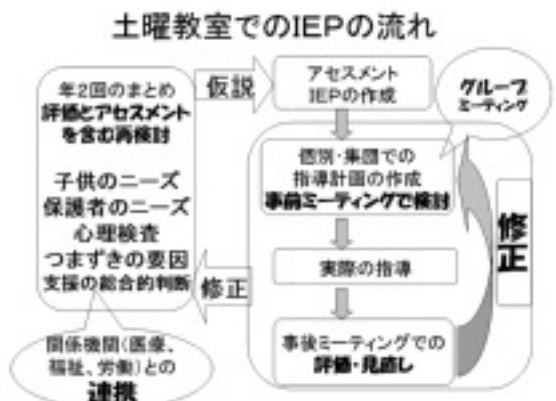


図3 北大土曜教室でのIEPの流れ

とに個別の指導計画で立てた目標に基づき、評価し、問題点や困難点の背景と WISC-III など心理検査のデータと付きあわせながらアセスメントを見直し、個々の認知特性に基づいたアプローチが検討され、時期の目標が設定される。図 3 は、教室での IEP の流れである。

班ごとに、子どもの EBA (Evidence Based Approach) にそって何度かミーティングを重ねて半期の指導計画が作成される。スタッフにとって年 2 回のまとめは、子どもの発した様々な学習上の疑問や困難の背景を探り子どもを知る上で欠かせない作業になっている。そして、教室での一連の IEP 作成の流れは文部科学省の提唱している「PDCA (Plan-Do-Check-Action)」システムを確立したものといえる。

海津は、(IEP の作成は)子どもを見ていく際の視点が構造化されて、子どものつまづきの見立て、つまづきの要因に合わせた指導が理論的になされるようになるほか、「指導計画——指導の展開——評価」というサイクルが、書面上のことから、ひいては思考の中でも循環されるようになる、と述べている。

私たちは、IEP を作ることで自らの専門性を高め、臨床に対する目と力を養っている。

3. 終わりに

土曜教室の流れに沿いながら「学び」について触れた。いくつか触れられなかった点がある。一つは、集団活動での学び、もう一つは子どもからの学びという二点である。簡単に触れて役割を終えたい。

集団活動は、週ごとに各班が担当しリーダーとなって活動を引っ張っていく。個別では、一人の

子どもを中心にみるが、集団では参加している子ども一人一人を頭に浮かべながら内容や流れ、配慮事項を検討していく。集団では個と全体の関係を見渡す力を養っている

最後に子どもからの学びだが、何年か前に新たに加わったスタッフの質問を今も自問自答している。彼は学食で、「子どもが社会に適応していくのではなく、社会が子どもに適応していくべきではないのですか」という趣旨の質問だった。その時には「子どもたちが生きづらさを感じる部分があれば、少しでも軽くしてあげたい。それが、学習であっても遊びであっても人との関係であっても。うまくできることが増えると、それだけ世界がひろがり生活が豊かになるのではないだろうか」と答えた記憶がある。「本人が変わるべきか、社会が変わるべきか」という命題に向き合いながら今も答えを探しながら教室に携わっている。おそらくスタッフの多くが、「子どもと向き合う」ことを通して人や社会のあり方について自問自答しつつ学びを深めている。

引用文献

- 海津亜希子(2005) 個別の指導計画ハンドブック, 独立行政法人国立特殊教育研究所。
- 片桐正敏, 小泉雅彦, 室橋春光(2006) 北海道における土曜教室のあゆみと取り組み, 北海道 LD サポート学会研究紀要, 5, 68-73.
- 北脇三知也(2007) C-9 個別の指導計画の作成と実施, 特別支援教育の理論と実践指導, 金剛出版。
- 竹田契一(2007) これから始まる特別支援教育とは, 小児の精神と神経, 47, 7-14.
- 牟田悦子(2007) B-1 総論: アセスメント, 特別支援教育の理論と実践指導, 金剛出版。
- 室橋春光他(2007) 北大土曜教室の活動, 北大土曜教室活動報告集。